



人生のスペシャリスト

永田円了

The Specialist in Life

職業として何か技能をもっている人をスペシャリストと呼ぶ。芸術家、アスリート、医者、弁護士、学者、何々職人などなど、時間とエネルギーをかけてその道を究めた人たちである。では、果たしてこの人たちは人生という舞台の上でもスペシャリストと言えるのであろうか。

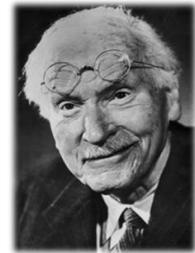
小澤征爾さんが本番を前に N 響とのリハーサルをしているシーンがあった。「ちょっと待った、もっと歌うように弦をひいてくれませんか」。小澤さんが楽団員に語りかける。鼻歌でも何でも、歌が生まれるときはそこに何か人生の喜びがある、楽器もその喜びをもって弾いてほしい、と促しているのである。

楽器を音符通りにただ正確に奏でることのできる超スペシャリストたち、しかしもし奏でる音楽に人生の喜びが感じられないなら、人生舞台のスペシャリストにはなりえない。

社会の仮面を脱ぐ

人は誰しも毎日の生活において、一種の仮面をつけているという(ユング)。教師の仮面、経営者の仮面、政治家の仮面、どれも自分の一面を表しているだけ、本当の自分は仮面の内側にいる。

「釣りバカ日誌」はいい事例である。会社では社長と平社員の関係のスーさんとハマちゃん、いざ釣りの世界にはいると、関係が逆転する。普通の人間同士の付き合いが始まる。社会の仮面を脱ぎ、素の自分が生き生きと人生に登場する。それができる人こそ、人生のスペシャリストと言えるのである。



大衆に迎合しない



「男はつらいよ」の寅さんはどうだろうか。いい年をして定職にも就かず、恋だの何だのってモジモジ言っているおじさん。無教養でわがままで、他人への要求が過大で、勝手に出て行っては勝手に帰ってくる男。大人としての成熟度が低い“幼児”のような男になぜ人気が集まるのか。

それは、寅さんは大衆に迎合しないからである。ポピュリズムに組まない生き方を貫きながら、人の幸せを誰よりも願っている男。この愚かな厄介者のおじさんに、私たち日本人は理屈抜きに愛着を感じる。そして寅さんもれっきとした人生のスペシャリストである。

海の向こうでは、二人の夢追い人を描いた「ララ・ランド」がアカデミー賞6部門を受賞した。夢は大きい分だけ人は悩む。生きて行くためには仕方がない、という言い訳をしながら大衆に迎合し、そうするうちに夢は色あせ始める。しかしこの二人の夢は5年の歳月を経て現実のものとなる。消えかけていた情熱、本物を求め続ける炎が夢を実現へと導いた。ただ、愛する二人が離ればなれになるという痛みをともなって。

自己実現とは、諦めること。何かをするということは、何かをしないということ。何かをしないことの辛さ、悲しさを自分が背負って行く。その荷物は私が背負っているのです、と言える限りにおいて、私は私を実現している(河合隼雄)。ララ・ランドのミアもセバスチャンも、見事な人生のスペシャリストである。

<事例 DVD等>

小澤征爾、N 響を指導 / 歌を歌うように演奏してください
玉三郎、京都賞 / 器用貧乏になってはいけない
徹子の部屋 / 銀座クラブママ、伊藤由美 / 人生のスペシャリスト
前川清 / 食うために歌を歌う、から、使命をもって歌うへ
トランプ大統領 / ただ選挙という勝負に勝ちただけ
釣りバカ日誌 / スーさん、ハマちゃん、素の自分を生きる
男はつらいよ、寅さん / 相手の幸せを誰よりも願っている
映画「ララ・ランド」2人の夢追い人、自己実現の過程
河合隼雄 / 自己実現とは



円了のホームページ: www.enryo.jp